

話すことから読むことへ「役に立つ」外国語

川本 茂雄

「役に立つ」外国語は必ずしも話しことばとしての外国語ではない。そう認めることに吝かであってはなるまいが、しかもなお、現在の世界状況では外国語を聴取し、話すことの能力が、ますます必要になっていることもまた否めない。

ところで、外国語を学んだり教えたりするに当って、まずその口頭能力を養い育て、それをさらに発展させて、読んだり書いたりする力を開発したらどうだろうと、誰しも一応思ってみることであろう。その理由としてしばしば、子供はまず話しことばを相当に使いこなせるようになり、それから読み書きを覚えるのだという事実が引合いに出される。しかし、これは充分な論拠とはならない。子供が母国語を習い覚えるのと、大人が外国語を学習するのでは、条件の相違があまりにも甚だしくて、一をもって他を推すことは無理だからである。

けれども、外国語習得の場合にも話しことばから書きことばへという順序を正しいとすべき別の論拠が、近頃主張されてきた。しかも、すでにそれが議論の段階にのみ止らず、実験によって裏付けられは始めている。

そのような知見をひらいてくれたのには、構造言語学の考えかたが大いに力あったといつてよろしかろう。構造言語学は、ことばというものは可成り数の限られた要素から成り立つものとの見解を生み出すことになった。一言語で用いられる音声の種類は、一般に思われているより案外に少く、そこにさらに音素という観念を入れて考えると、構成要素がいつそう数少くなる。音声としても音素としても、一言語の母音は5箇ぐらいから1・5箇ほどに限られている場合が多い。文法構造について考えてみても、例えば文型というものはそう数の多いものではない。少くとも日常頻繁に使われる文型の数は、整理の仕方によっては相当に少いということが可能

になる。ただし、語彙()は例外で、一言語の単語は何万という数に及ぶのが普通である。けれども、ここでも、ごく具体的な日常生活のためには1,000語から、せいぜい2,000語もあれば、結構間に合うということが次第に広く認められつつある。或る言語を新しく習う場合に、限られた数の要素をしっかり身につけて、それらが自由に使いこなせれば、その後は生活経験が豊富になり、高度な文献に接することが多くなるにつれ、単語や熟語が次第に多くなってゆく。要は、基礎的な音声(音素)、文型、単語を何の苦もなしに使いこなす力を、まず身につけることである。そういう力がいったん身につけば、外国人と話し合う機会も多くなり、話し合ううちに外国語の知識も増してゆけるのである。その反対に、いつまでたっても懸命に耳をそばたてゝいなくては相手の外国語の発音が聴きとれないというのは、会話が億劫になり、雪だるま的な発展はまず望むべくもない。

こうした限られた基礎的な構造要素を、それをほとんど無意識に使いこなし得るまでに身につけるには、初学段階で徹底的に練習を重ねることが必要である。習得すべきことが限られているから、それだけ時間を充分かけて練習しても、実は案外に時を要しないのである。しかも口頭で訓練を進めてゆくと、比較的短い時間に多量の練習を積むことができる。いろいろの実験・調査の報告によると、ほぼ200時間から300時間の練習を2月ないし3月で行うと、初歩的ながら流暢な外国語が使いこなせるようになる。300時間のうち少なくとも100時間は、language laboratoryで先生なしで練習をすることができる。300時間全部をテープの録音教材だけで独習させるという方法も、アメリカでは実験されて、成功が報ぜられている。ちょっと外国人とは感ぜられないほどの流暢さに至ったという進歩の例が報告されている。

こんな傾向をもっと研究発展させてゆけば、話しことばから読み書きへと、一貫して「役に立つ」外国語の力が養成されてゆくというもの、あながち不可能ではなくなるのではなかろうか？

(語学教育研究所管理委員)